

陶簋圈足上環刻陶文

法門鎮召陳甲区北 5m の西周中期の灰坑内より出土。

この文の訳は、出土直後「器叟訖書成為王」の 7 字とされていた。

1985 年、陝西省文物局副局長陳全方氏は『周原出土陶文研究』で、

「叟」は「史」＝「使」（金文に多く見られる）。

「書」の下半分に未刻があり、その下に「造」がある。

ことから「器使訖書造」だとしたが、意味が通じない。

また、「王」が横なのは諱を避けるのと同じ意志。

と解説している。



私は平成 9 年(1997)の「第 23 回 書海社選抜展」に右の作品を発表した。

跋にあるように、

「訖」は「文」の中に「心」があり「恣」「言」との合字で「恣言」

「書」は「聿」と「之」

「成」は「國」（毛公鼎にある）とし、

「器使恣(つとめる)言 聿(おさめる)之 造國為王」と解釈した。

この推論によれば、『左伝』定公八年に、

（傳八・七）晉師將盟衛侯于鄆澤，趙簡子曰：「群臣誰敢盟衛君者？」

涉佗、成何曰：「我能盟之。」衛人請執**牛耳**。成何曰：「衛，吾溫、

原也，焉得視諸侯？」將敵，涉佗掇衛侯之手，及挽。衛侯怒，王

孫賈趨進，曰：「盟以信禮也，有如衛君，其敢不唯禮是事而受此盟

也？」衛侯欲叛晉，而患諸大夫。王孫賈使次于郊。大夫問故，公

以晉詬語之，祖曰：「寡人辱社稷，其改卜嗣，寡人從焉。」大夫曰：

「是衛之禍，豈君之過也？」公曰：「又有患焉，謂寡人『必以而子

與大夫之子為質』。」大夫曰：「苟有益也，公子則往，群臣之子敢不

皆負羈縲以從？」將行，王孫賈曰：「苟衛國有難，工商未嘗不為患，

使皆行而後可。」公以告大夫，乃皆將行之。行有日，公朝國人，使

賈問焉，曰：「若衛叛晉，晉五伐我，病何如矣？」皆曰：「五伐我，

猶可以能戰。」賈曰：「然則如叛之，病而後質焉，何遲之有？」乃

叛晉。晉人請改盟，弗許。

とあるように、

“ 諸侯が盟約を結ぶとき、その盟主が牛の耳をとってそれをさき、
血をすすって誓いをたてた → **牛耳を執る(牛耳る)** ”

という故事が浮かぶ。

とすればこの陶簋は、上記の牛の耳を入れる器で、諸侯が王のもとに集まり、協議をする机上に置かれたのではないかと推測される。

もともと、所詮素人、古代のロマンに留めるべきかと思う。

太林風縣法門鎮召陳甲区北 5m 西周中期灰坑内出土陶簋圈足上環刻之文字也
陳全方氏釋為器叟訖書成為王又陳師懷氏釋為器史訖書造成為王
我觀其考索史字也許是周書訖字也許是恣字或字也許是國字大夫

器使恣言 聿之 造國為王